

国内研修成果報告書

-檜枝岐歌舞伎の継承について-

1. 研修場所・日時

福島県檜枝岐村。2023年8月20日～23日（事情により21日より合流）

2. 活動内容

- 1日目 檜枝岐村役場職員にインタビュー（※不在のため内容共有）
- 2日目 歴史民俗資料館見学、檜枝岐の舞台見学
- 3日目 安宮清水見学、公民館職員にインタビュー、道の駅見学
- 4日目 山旅案内所職員にインタビュー、檜枝岐歌舞伎伝承館管理人にインタビュー

3. 活動目的

今回グループ全体の調査テーマとして、「檜枝岐村の共同性と平等性」を取り上げた。野田先生の地域問題入門で紹介された同村では、個人の利益を独占するような観光ではなく、利益を村全体のものとして捉え、内発的な観光が行われている。このような考え方はどのようにして生まれ、引き継がれてきたのか詳しく伺いたいと考えた。また、個人の興味として、村に伝わる歌舞伎はなぜ衰退せず残り続けているのか、どのように継承しているのか気になった。これらを明らかにするため、研修を行った。

4. 檜枝岐歌舞伎とは

檜枝岐歌舞伎は、江戸時代後期にお伊勢参りに行った際、大歌舞伎を観劇した檜枝岐村の農民が、見よう見まねで村に伝えたことが始まりといわれており、約280年の歴史を持つ。千葉之家花駒座は1922年、当時の村長・星愛三郎氏が座長となり、村民とともに立ち上げた。村の祖先が千葉平氏の流れ汲み、会津駒ヶ岳に咲くきれいな花が座名の由来となっている。年に2回、鎮守神の境内の舞台から奉納歌舞伎として披露しているが、近年の観光客の増加により、観光用の歌舞伎を披露する機会も増えた。

昔、奥会津地方は幕府の直轄地で、芝居を抑制しようとする藩の支配が強く及ばなかったため、多くの舞台と歌舞伎一座があり、農村歌舞伎の栄えた地域であった。しかし、その多くが現在では取り壊され、残っている一座もわずかである。当時、他に娯楽がなく、村民の楽しみとして伝承されてきた。奉納歌舞伎の日の夕方には、村のひとはほとんど舞台のある神社に集まったという。現在では、年2回の奉納歌舞伎に加え、9月の第一土曜日に「歌舞伎の夕べ」という観光歌舞伎の舞台が披露されている。

檜枝岐歌舞伎が上演される舞台は国の重要有形民俗文化財に指定されており、檜枝岐歌舞伎は1999年3月31日に福島県の重要無形民俗文化財に指定されている。現在、千葉之家花駒座の座員は裏方も含め、下は5歳から上は77歳まで、老若男女30名ほどが在籍する。

5. 檜枝岐歌舞伎の継承の現状

〈世代間の距離感〉

前述のとおり、座の中で若い世代と年長世代の間で考え方の違いが生まれているというお話があった。このことについて、第11代座長の星昭仁さんにお話を伺った。星さんも、この考え方の違いについて実際にそう感じるという。以前は、練習後にはよく飲み会が開かれ、親交を深めながら、後輩は同じ役を務めたことのある先輩に動作のコツや抑揚の付け方などについて教わった。しかし、今の若い世代は、基本的に練習後は早めに家に帰る。星さんはこのことについて寂しく感じるという。演目を練習するにあたって以前上演された映像を参考にしているが、演じた年や役者によって多少の癖が出るため、本物の型と違う場合がある。長年座にいる先輩から、「あの人はこうやって演じた」や「この動作はもっとこのように」など、飲み会の場で先輩に教わることで身に付けることのできることもある。これは教科書のように記録として残せるものではなく、その場において見聞きすることが一番の成長になると語る。

しかし、年長世代は若い世代の時間の使い方を強く否定したいわけではない。練習は平日の夜に行われることが多く、仕事の後に集まる人ばかりだ。仕事と練習の日が重なれば、自動的に家族との時間や自分の時間が減ってしまう。年長世代は、その時間の確保に理解があるが、飲み会の場で親交を深め、長く伝わる技術を教わることも重要であると考えている。

〈中学生への指導〉

近年では、檜枝岐歌舞伎が観光化した影響で、子どもたちが歌舞伎に触れる機会が減少している。そんな若者の歌舞伎離れに待ったをかけるため、檜枝岐中学校で生徒に歌舞伎を教える活動が2010年に始まった。その成果として生徒たちは、文化祭の舞台上で衣装をまとい、化粧を施し、歌舞伎を披露する。この活動を通して子どもたちは自分が育った村の文化に触れることができるのだ。檜枝岐の子どもたちは、高校進学のために一度は村を離れてしまう。将来座を支えることになる世代が子どもの頃から歌舞伎の文化に親しむことで、大人になって檜枝岐に帰ってきたときに、座員になるという選択肢を近くに感じることができるのではないだろうか。

〈村外からの参加〉

千葉之家花駒座は基本的に村民によって構成されているが、練習に参加することが出来るなら村民以外も参加可能である。以前、村の郵便局の職員が参加していた過去があるという。しかし、交通の便の少なさや冬の豪雪の関係から、参加するのは容易いこ

とではない。このように誰でも簡単に参加することが難しい実態が、熱意を持った人を厳選し、質の高い技術の伝承が可能になるのかもしれない。

6. 気づき・感想

若い世代と年長世代の間で考え方の違いの中には、どちらの世代も自分たちの代で檜枝岐歌舞伎の伝統を途絶えさせていけないという強い思いがあるという。飲み会の場で先輩から教わることも重要であるが、若者が飲み会を強制されてしまうとそれを好ましく思わない人々が歌舞伎から離れてしまうことも考えられる。伝統ある活動を続けていくには、どちらの思いも尊重した活動の変容が求められていくことだろう。

檜枝岐歌舞伎伝承館でのインタビューの際、館内に流れていたのは上演された演目の音声であった。小さな子どもの堂々とした台詞回しに星さんは顔をほころばせ、その役者について語ったことが印象的である。その方の初舞台の話や、ご家族の話などを優しい顔で聞かせてくれた。檜枝岐村は小さな村であるからこそ、村民同士が顔見知りで距離が近い。村の人々が子どもの成長を他人以上の視点から感じることができることは、檜枝岐村の魅力であると感じた。

さらに、檜枝岐村での印象なことの一つに「人の視線」を挙げたい。檜枝岐村は観光業で有名な村であることから、村の人々は基本的に人に慣れている。これは村の人からも語られた言葉である。実際に、道ですれ違った小学生が明るく挨拶をしてくれたり、インタビューでお世話になった皆さんも観光客向けの説明に慣れている印象を受けたりした。しかし、はじめの視線は冷たいと語られることもあった。我々が道を歩いていると、どこの人が来たのかじっくりと観察されていたように感じた。公民館で話を伺った平野さんは村外の出身だが、村に来た当初は誰が来たのか、どんな人なのか、村の人から多少見定めるような、興味が目線があったという。もちろん、慣れた頃には村の仲間として声をかけてくれ、お世話になったそうだ。村の人からすると、このような目線は、地方において珍しくないことである。外の人間を良くも悪くも警戒することは、村の防犯力を高めることにつながる。村の子どもたちがのびのび遊ぶことが出来るまちづくりに貢献していると言えるだろう。

7. 最後に

我々の研修のために時間を作って親切に対応してくださった檜枝岐村のみなさん、本当にありがとうございました。